

# 頑張る難民の復興支援

アフガニスタンへの空爆開始から四か月。回国では、二十年以上に及ぶ混乱から三百万人を超える人が隣国などに流出したとされるが、国連による難民キャンプもようやく始動、医療民間活動団体（NGO）「アムダ」（AMDA、岡山市）の活動も本格化している。隣国パキスタンで二度にわたって緊急救援活動に携わったアムダ本部職員谷合正明さん（28）にこれまでの活動の様子を聞いた。（岡山支局 阿利明美）

砂ぼこりの荒野に「UN 規模の「ムハンマド・ケイツタから約三時間、バスに避難する行列の姿もなかった。谷合さんが初めてパキスタンに派遣されたのは空爆直後の十月下旬。だが、現地には集まった世界中のNGOは「見えない難民」に悩まされていた。米同時テロ以降、パキスタンに流出した難民は十数万人と言われているのに、どこにも姿が見えなかったからだ。

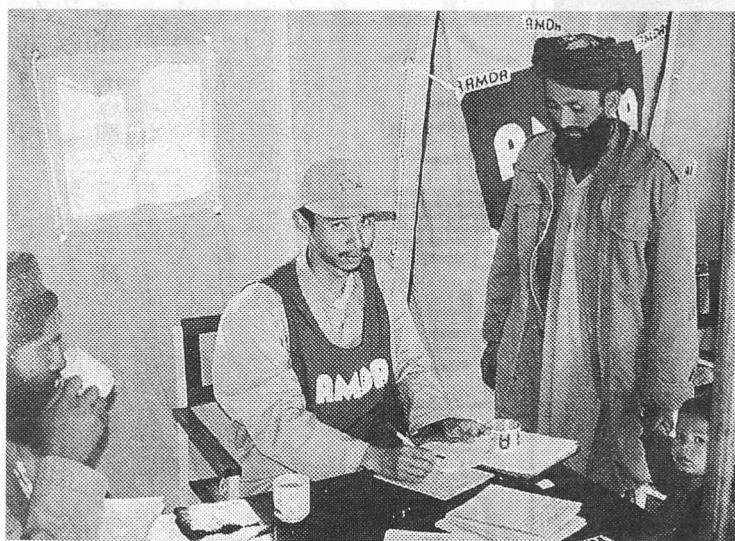
声を出して叫んだ。

谷合さんが初めてパキスタンに派遣されたのは空爆直後の十月下旬。だが、現地に集まった世界中のNGOは「見えない難民」に悩まされていた。米同時テロ以降、パキスタンに流出した難民は十数万人と言われているのに、どこにも姿が見えなかったからだ。

当時、難民は家族単位でバスを乗り継ぎ、徒歩で山を越えるなどしてアフガニスタンから逃れていたため

のほかに、アムダが支援して

民の健康状態のチェック、登録業務を引き受けた。メンバーは日本の看護婦



パキスタン・クエッタ近郊の難民キャンプで支援活動にあたる谷合さん（中央、2001年12月28日撮影）＝アムダ提供

## 診療、調査に協力次々

きた私立病院で働く三十歳前後の看護婦五人。彼女らは全員がアフガニスタン難民で、朝から晩まで休む間もなく、やりがいがある」と笑顔で働いてくれた。

砂ぼこりの舞うキャンプでテントの中にじつとうずくまっている家族がいる一方、自ら手を挙げてボランティアで交通整理や警備をかって出る人も少なくなかった。谷合さんは「難民はかわいそうでもできない人たちの集まりではない」と力を込める。

クエッタ市内の難民定住区で地元の診療所を借りて巡回診療した時、小さな土造りの家に数百人の患者が押し寄せたが、英語を話す少年（14）が進んで患者の整理を手伝ってくれた。「いつかカブールに帰って、英語を生かした仕事をしたい」とときらきらした目で語ったのが印象的だったという。

「私たちの仕事は、悲惨な人を支援する」だけでなく、頑張っている人に復興するチャンスが持てるよう支援すること」と谷合さんは強調する。「クエッタ周辺の難民がアフガニスタンに帰るのは春以降。それまでが正念場だ」。アムダは三月にも次の医療チームを派遣することになっている。

見る  
聞く  
探る

ルポ岡山